私の戦争体験から得られたもの

大高俊昭
上鷺宮五丁目

あの大東亜戦争が始まったのは、小学校六年生の時である。東北の関、福島県の白河が、わが郷里である。昭和十七年旧制白河中学に入校、勤労動員と称して、出征農家の稲刈りや田植えに頻繁に行かされた。

白河には軍用馬の育成牧場があり、広い飼料用とうもろこし畑があった。一本の畝を草むしりすると半日かかる。戻ってくると、もう一日である。そんな除草作業もやらせられた。中学二年になったら、農家に泊りこみで、湿地水田の排水を良くするために、暗渠排水の土木作業もやらせられた。

昭和十九年、愛国心旺盛な先生方の計らいで、横須賀海軍工廠の作業員として送り出されることになった。中学三年の我々の級は、力がなかろうということで、金沢八景近くの海軍工廠、六浦火工工場の傍に、作業員宿舎が作られ迎え入れられた。

工場は山を削って造られ、それぞれが、誘爆しないように分散されていた。そこで爆弾や高射砲弾に火薬をつめる作業をした。成型されたNTTの火薬を爆弾につめる。何本ものネジでしめる作業であるが、四方から上手にしめてゆかないと、ネジがしまらない。安全靴などはいてないので、よく足の指をつぶした。筆者の左足の二番目の爪は今でも、正常にはなっていない。

高射砲の弾には、火薬をパラフィン槽でとかして流しこむ。とかしかたがわるいと、すができてしまう。そんなときは、全部やりなおしである。

十九年暮頃から、米軍機の機銃掃射をうけるようになり、生きた気持ちがしないまま防空壕に避難したものである。六浦の工場は、今でも使えるようになっている。我々の中学の級会は六浦会と称して、何年に一度かはこの跡を訪ね、昔をしのんでいる。

この経験で危険品を扱う度胸ができたので、貿易貨物の検査に携っている筆者にとっては大変役に立っている経験である。

戦争は更に進み、多くの人が軍の学校に進むようになってきた。筆者も海軍にあこがれていたが、眼がわるく、兵学校には

入れない。むずかしい海軍経理学校に挑戦することにした。五〇倍もの受験者から選ばれ、昭和二〇年四月、奈良県橿原に新設された海軍経理学校橿原分校に、六〇〇人の級友とともに入校した。まだ十六歳の子供であるが、立派な海軍士官の服装に短剣を吊って街をかっ歩したものである。海軍の秀れた先輩が教官として配置され、言うところの英才教育が行われた。学科だけでなく、体育など、ほとんどの生徒が、空中転回までできるようになるのだから見事である。水泳のできない生徒は、泳げるようになるまでプールにつけておかれたり、食物に好き嫌いがあれば、連日それを食べさせられ矯正された。将来、海軍の生活のすべてを取りしきる主計科士官には、どんな欠点も許されない。

主計科のシンボルとなる襟章は白である。

いかなる圧迫、誘惑にも負けずに、白い潔白心を、精神的に維持してゆくことを強く教えこまれたのである。

国際取引の貿易貨物検査員として四〇年にわたって活躍してきたが、この白色を守る精神は、公正を第一とする検査員の生活の教訓として、大きく生かされている。

二〇年四月から八月までの訓練で、戦争は終わった。残念の涙を流しつつ、それぞれ故郷に戻ったが、ここで鍛えられた智力、体力は、それぞれがよく発展させ、海軍経理学校三九期生徒会（讃若会）の集まりに馳せ参じてくる。現在、政・財界において当代一流の社会人となり社会の発展に貢献している。たった五か月の生活であったが、命をかけて祖国、日本の勝利のために一生を棄て、訓練に励んだその後の生きざまは立派である。

農林省の食品総合研究所（当時食糧庁食糧研究所）に入所した筆者は、戦後食糧不足の日本が、輸入した大量の外米がかびに汚染され、食用不適となってしまった事実を憂い、何とかよいものだけを選んで、買い付けなければならないと、タイ国・バンコクに使命感を持って飛んで行った。そしてビルマ、スペイン、イタリアまで飛んだ。幸い輸出国の協力も得られ、言うところの黄変米事件も納まった。

「お前の国は食糧不足で困っているのだ。協力して売ってやろうとしているのに、物がわるいとか、難クセをつけるお前は何者だ」と、あちこちで嫌味を言われたことは一生忘れられない。ここでがんばったので、検査会社は企業として独立し、世界の検査会社として生き長らえているのである。

いかにして、食品の安全性を守るかが、その後の筆者にとっての大きな生き甲斐となり、使命となってきている。

食品学の大先輩、酒博士、歌人の坂口謹一郎先生は小生のために「とつくにの食物（たべもの）しらべ　このくにの我らの食を　安らけくませ」と、ほろりとする名歌を作ってくれ、応援してくれている。

昭和三六年より中野区上鷺宮五丁目に住むことになった。

その後もタイ、インド等に住み、また、多くの国を回り歩いている。インドとパキスタンとの戦争の時には、ボンベイで生活した。燈火管制も行った。

戦争がこんなに恐しいものとは思わなかった。それまでスムーズに行われていた貿易がピタリと止まってしまったのには、びっくりした。貿易で生きている日本が、戦争の渦中にまきこまれたら、一年ももたずお手あげになってしまうだろう。

戦争はしてはいけない。多くの国々を回り、その戦争の恐しさと馬鹿らしい損害とを見るにつけ、私の戦争体験は何だったのかと、深く反省させられるものが多い。

若くて優秀な人が軍隊に行った。そして、莫大な軍事予算が戦争に使われた。そんな時代がなくなって四〇年、日本はその間に他国を追い抜いて、大きな経済発展国になったのである。

相手国の立場になって考える。これは、他人の立場を理解してつきあうことにも通ずるが、生いたちや、環境の違う世界の多くの国々がともに幸福と安泰を願って地道な努力をつづけている。その努力を正しく公正に判断して、もし援助を求められたらそれに呼応してゆくことが大切だろう。押しつけの援助は、どこも、誰も、望まないだろう。

戦後の日本の発展は、他国の援助を潔しとせず、自助努力の精神に徹したことの勝利である。

自分の国は他国に迷惑をかけずに自分で守ってゆくことが大切だな、とつくづく考える今日この頃である。小さな戦争体験だったがその後の人生に得るところの多い貴重なものであったと痛感している。